紹介

室城秀之著『源順全歌各句索引』室城秀之訳注『新版　落窪物語』（上・下）

佐藤信一

まず、『源順全歌各句索引』（私家版）は、二〇〇二年に刊行を見た『源順全歌集』の各句索引である。ただ、各句索引といっても、そこに様々な工夫が凝らされていることが見て取れる。ところで、『源順集』は、二類七系統に分けられているが、本書ではその一つ一つの用例が一望の下に見渡せるのである。また、底本にない順の歌を補っている。『国歌大観』でも補われていない歌もいくつかある。『康保三年五月五日下総守順馬毛名歌合』や、『好忠集』、さらには八代集や、他の私家集所載の順の歌も収められている。歌番号の後に句番号も付されており、長歌での用例の検索も容易であろう。また、用例と共に歌全体が見渡せること、さらに、勅撰集の用例は部立てと共に掲出していることも、この索引の優れた点ではあるまいか。この索引は、『国歌大観』を引くときに感じる隔靴掻痒のような苛立ちを、全く伴わないのである。この索引で用例を検索すると、諸本間の校異にも注意を払わざるを得ない。

具体的に見よう。「などかゆゑ」を引いてみる。II類の第一系統、65番歌「やまもかく　みなもみちけり　なとかゆへ　むしのなくねを　もとくしらつゆ」と掲出されている。ただそこに「「なな」の後の「な」ミセケチ」と注記されており、これは原本では「ななとかゆへ」となっているのだと読み取れる。このように、常に原本の状態も復元した上での用例の検索を可能たらしめている索引であると言うことが出来よう。

また、原本の状態と言うことに関して言えば、この索引では欠字箇所も検索の対象にしているのである。こうした点からも、常に原本と向き合っている索引であると言えるのではないだろうか。

（二〇〇四年二月刊　B5判　四五一ページ　私家版）

次に、角川文庫『新版　落窪物語』（上・下）は、室城先生による『落窪物語』の注釈である。宮内庁書陵部蔵『おちくぼ』を底本とする。本文、脚注、現代語訳、本文校訂表、補注、解説、主要人物系図および官職、資料一（『風葉和歌集』所載和歌）、資料二（脚注引用和歌集・作品別一覧）、和歌初句索引、重要語彙索引から成る。上巻に巻一巻二、下巻に巻三巻四を収める。補注は、下巻に纏められている。また、解説には、「『落窪物語』は、「落窪」から始まる住まい移りの物語でもあった」や、琴などを演奏しない姫君を主人公にすることによって「『落窪物語』は、『うつほ物語』とは異なる女主人公を創造し

ようとしたのではなかったか」と言った指摘が目を引く。また、「古典文学における会話文の認定は、作者自身が提示したものではなく、読みによってささえられていることをあらためて確認しておきたい」とする。つまり、引用の格助詞「と」を伴わずに発言者が移行した可能性を考慮する必要があるのである。また、「物語の会話は、途中で発言の相手が変わることがある」と指摘する。会話を読むことが必須なのである。室城先生の言わんとするところは、解説の最後で「言葉を通して、作品と直接向き合いたい。物語の言葉に耳を澄ませることで、言葉に託されたメッセージをしっかりと自分の手でつかみたい。そんな思いで、『落窪物語』を読んで、注と訳をつけた」とされている。このように「言葉」にこだわりながら読むことが、古典を読むのに際して欠かせないものであることを痛感させられた。

ただ、瑕瑾を論えば、上巻、巻一の一〇、二七頁「少将、姫君に文を送り続ける」の「ほに出でて言ふかひあらば」の和歌につけられた注三に「「かひ」に「効」と「穎」(穂)……を掛ける。」とするが、「穎」は音が「エイ」であるので、この場合適切なのか疑問が残った。また、下巻、巻三の四〇、七九頁、注二〇の[補注21]とあるのは、[補注22]の誤り。

しかし、この文庫版の落窪、また、源順集の索引が、多くの読者によって読まれ、また利用され、『源氏物語』を中心とする女流文学以外の男性官人による平安時代の文学にも脚光が当てられる日の到来を疑わない。

(二〇〇四年二月刊　文庫判　〔上〕四七一ページ・〔下〕四二八ページ　角川書店)